

中世真名軍記における助動詞「ケリ」の表記について

橋村 勝明

一、はじめに

変体漢文はその生成過程から、大きく第一義的変体漢文と第二義的変体漢文とに分類される¹。古記録などの第一義的変体漢文は日本語文の背景を持ちながら漢字によって構成された文であり、それと比較すると第二義的変体漢文は日本語文を前提とするという生成過程を経るので、より明確な形で日本語の反映が認められる。第二義的変体漢文を生成する際には、その明確な形での日本語の反映ということと、第二義的であっても漢文であるということ、つまり日本語文でありながら漢文であるという矛盾が様々な形で表記上に表出される。

例えば、助詞助動詞の類は日本語文独自のものであるもので、それらを明確に変体漢文中に表記しようとする、様々な工夫を必要とするのである。その工夫の一つとして、『応永記』における真仮名使用が指摘できる。

『応永記』は、応永六（一三九九）年に起きた、大内義弘による足利幕府に対する反乱を描いた軍記で、真名本では

朝倉氏蔵本と、一部片仮名を交えながらも朝倉氏蔵本と同一系統とされる国立国会図書館蔵本とがある³。その朝倉氏蔵本の助動詞「ケリ」の表記は、小書きと真仮名の両様があり、初めは小書きで表記されながらも途中から真仮名を主とする表記に変化をしてゆく。このことについて、小林賢章氏は次のように指摘している⁵。

真名化を試みた人物は、本来漢文表記には存在するはずのない「ケリ」の小書きが頻出することに、真名化が充分に行われていないということを感じたのではないか。

本来漢文表記に存在しない「ケリ」をどのように表記上書き表すかということは、『応永記』に限らず、例えば『大塔物語』では「梟」字を「ケリ」として用いることによってこの問題を解決している。

このように、日本語を漢字文によって明確に表記しようとする、日本語文と漢字文との整合を図らなければならないのであるが、本稿ではそれぞれの資料における解決法とその背後について、特に助動詞の「ケリ」の表記に注目

して検討をしてゆく。以下、先に指摘をした小書き、真仮名、漢字表記の順に検討をしてゆく。

二、小書きの「ケリ」

漢文訓読資料における仮名点としての「ケリ」は、築島裕氏によると殆ど使用されないか、使用されたとしても定型的な用例のみである。もちろん、本稿で問題としている資料と漢文訓読資料とは時代的にも資料的性質としても隔たりはあるが、漢字文の訓点としては「ケリ」が多用されないなか、次に掲げる用例のように、朝倉氏藏本『応永記』において訓点と同じ様式で「ケリ」が用いられているのである。『応永記』の用例を掲げる。

応永六年九月比客星南方出^{ニケルヲ} 陰陽頭有世勘申^{ヘケルハ} 太白^ハ
与^{ケイコク}災惑^{スル} 合交^{スル} (三一)

或陰陽勘^ハ 雖^{ヘニハ}有^ル兵乱^ニ 非^ニ国主凶^ニ 唯謀叛^ノ有^テ大将^ハ
可^レ易^レ地共申^ル (二四)

小林賢章氏は、この『応永記』の小書きの背後には、和漢混淆文体が存し、更に「むしろ広く、「ケリ」が小書きさされている真名本の背後には、和漢混淆文体の一本が考えら

れよう。」として、同種の資料として『源平闘諍録』、四部合戦状本『平家物語』、妙本寺本『曾我物語』を挙げておられる。

『平家物語』諸本についてさらに確認をすると、熱田本⁸、平松家本⁹についても小書きの「ケリ」が認められる。同文的箇所の用例をそれぞれ掲げる。

熱田本『平家物語』

向^テ火^ノ仄^{ホノ}暗^{ラキ} 方^ニ其^ヤ俣^ヲ拔^キ 出^{ヒテ}此^ノ刀^ヲ 引^キ二^ニ当^ハ 鬘^ニ從^リ他^ハ
所^ニ一^ニ如^レ氷^ノ見^ル 諸^ノ人^ハ澄^レ目^ヲ (卷一・三ウ二)

平松家本『平家物語』

火^ノ漸^{ホノ}暗^キ 方^ニ和^ニ刀^ヲ拔^ヲ出^ニ鬘^ニ引^ニ当^ハ 氷^ノ何^ニ度^ニ様^ハ 見^ル 諸^ノ人^ハ目^ヲ
清^ク (卷一・四オ一)

また、語学的な観点から『源平闘諍録』と妙本寺『曾我物語』との共通の成立基盤を持つと指摘した¹⁰、『神道集』についても確認すると、小書き「ケリ」が確認される。

抑伊勢太神宮此^ニ国^ニ下^ニ時^ニ、第六^ノ天^ノ魔^ノ王^ノ見^レ之^ヲ、国^ヲ
失^ハ下^ニ、太神宮魔王合^ニ、我^ハ三^ハ宝^ハ名^ハ字^ハ云^ハ、我^ハ身^ニ
近^{ケシ}付^テ、疾^ク々^ニ返^リ昇^ル 誘^ハ歸^ル (四二)

以上のように、いくつかの資料において小書きの「ケリ」を指摘できるのであるが、『応永記』のように真名本であり、かつ試行錯誤の痕跡が確認できる資料や、『平家物語』『曾我物語』などのようにある程度真名本としての資料的な位置づけがなされているものについては「小書き」として良いが、成立過程が不明確な資料については訓点と小書きとを判別することには困難が伴うであろう。

三、真仮名の「ケリ」

次に真仮名の「ケリ」についてであるが、以下に掲げる『応永記』のような散文における真仮名の使用例は、全編にわたって真仮名が使用されている真名本『伊勢物語』などの例を除いては見出し難い。

ケリ

民部大將^ハ不^レ討^ニ迎^ヲ向^ヲ兵^ヲ打^ツ背^ケ互^ニ我^ニ先^ニ討^シ死^シ戦^シ計^リ利

(二四一〇)

ケル

去^ニ程^ニ義^ニ弘^ニ入^ニ道^ニ相^ニ公^ニ已^ニ有^ニ御^ニ動^ニ座^ニ於^ニ東^ニ寺^ニ御^ニ出^ニ之^ニ由^ニ伝^ニ聞^ニ
其^ニ日^ニ八^ニ石^ニ津^ニ出^ニ向^ニ北^ニ札^ニ成^ニ計^ニ流^ニ哉^ニ

(二〇七)

ケレ

味^ニ方^ニ有^ニ四^ニ方^ニ一^ニ我^ニ先^ニ破^ニ入^ニ氣^ニ不^レ繼^ニ責^ニ計^ニ礼^ニ城^ニ中^ニ四^ニ方^ニ走^ニ
從^ニ櫓^ニ究^ニ竟^ニ強^ニ弓^ニ勢^ニ兵^ニ刺^ニ詰^ニ穹^ニ詰^ニ散^ニ々^ニ射^ニ計^ニ流^ニ

(二四一)

右の用例のほかにも用例は存するが、「ケリ」の真仮名表記としては「計利」(3例)、「計流」(42例)、「計礼」(20例)の三種のみである。他の真名軍記では和歌に真仮名の用例を見いだすことができる。『応永記』の真仮名とは表記の背景が異なるので単純には比較をすることはできないが、用字の比較のために用例を掲げる。

『源平闘諍録』には四六首¹²が掲載されているが、そのうち「ケリ」を含むのは四首である。

ケリ

美山木其梢登毛和賀佐利志桜花忍顯氣利

(一之上・三四才4)

ケル

都詠月諸共旅空出氣留哉

(八之上・四ウ9)

ケレ

竹子守山古曾楚多知希礼

(一之上・二五ウ5)

桜花賀茂河風恨那与散於江古曾留佐里希連

(一之上・二九才5)

非常に僅かな用例ではあるが、「ケリ」の「ケ」に使用される真仮名には「氣」「希」の二種が認められる。

熱田本『平家物語』に掲載されている和歌は、全部で九四首であるが、真仮名で記されているのはそのうちの六首で、それ以外は漢字平仮名混じり表記である。真仮名で記された六首のうち、「ケリ」を含むのは次に掲げる二首で、

先に掲げた『源平鬪諍録』と同じ和歌である。

ケリ

太山木乃其梢共見得左利志桜八花丹頭爾計李

(卷一六三ウ5)

ケレ

桜花賀茂乃河風宇良牟南与散遠波得古曾不留計礼

(卷一四六オ6)

『源平鬪諍録』と熱田本とを対照すると、「ケリ」は「氣利」と「計李」、「ケレ」は「希連」と「計礼」となっており、同文であっても用字が異なっている。

成立年代は大きく異なるが、真福寺本『将門記』¹³の和歌も真仮名で書かれており、連体形「ケル」が指摘できるが、これまでに確認をした用字とは重ならない。

花散之我身牟不成吹風波心牟遭杵物爾佐利計留

(四四6)

韻文の真仮名については、これまでのような軍記ではなく類書であるが、室町時代成立の『塵荊抄』¹⁴に引かれている和歌に真仮名「ケリ」の用例がある。

ケリ

取渡須坂田乃橋乃中絶手稲負鳥渡佐利計利

(下二〇11)

ケル

禪釋別雷 神志阿礼波 治爾計留天下哉

(下四七七)

「ケリ」は右の用例のほか三例あり、全て「計利」である。用例数が少ないために、傾向を把握することは困難であるが、真仮名を表記主体とする真名本である真名本『伊勢物語』¹⁵によってみると、「ケリ」の用字は以下になる。

ケリ			ケル			ケレ		
計利	氣梨	遣利	計流	計留	遣留	計礼	希礼	氣礼
220	1	4	217	28	1	119	1	1

散文と韻文との違いはあるが、『応永記』や『塵荊抄』の「ケリ」の用字は、『伊勢物語』に多用されている「計利」「計留」「計礼」と重なるという点において標準的なものであることが窺い知れるのである。

『応永記』の真仮名「ケリ」の表記種が固定されているの

は、真仮名による表現性を意図したのではなく、小書きの「ケリ」を見た目として漢字のように移し替えたに過ぎないという極めて実用的な機能を有しているに過ぎない。そのため、字種が固定化されているのではないかと考える。

四、漢字の「ケリ」

中世真名軍記には、これまでに取り上げた小書きや真仮名以外に漢字表記「梟」を用いる資料がある。これは、「ケリ」に限らず「杜」（こそ）、「辻」（とて）など漢字表記が困難な語を表現する方法として採られてきた。

このような方法により「ケリ」を表記する真名軍記としては嘉永四年版『大塔物語』があり、全三〇例を指摘できる。

ケル

所々入部之使出或追立或討殺梟杜弓矢手合國急劇之始成

(九オ7)

ケレ

大塔者敵陣差二轡四方二日夜要心理梟難二翔二飛鳥二彼等可二返遣二方便悉盡了失二爲方二計也

(二一オ5)

また、嘉永四年版『大塔物語』では漢字表記のほか、小

書き「ケリ」も存する。

今日帥者長國承二奉行二軍可二下知仕二云長秀
阿良々々昭尤々々謂間諸軍勢聞レ之那不レ死折臂
弄言二各成二一騎當千之思二我先進 (二二ウ3)

漢字によつて「ケリ」を表記するという方法は、正確な日本語の再現を志向しながらも見た目が漢字である真仮名を使用するという文字機能としての仮名の部分を捨象できなかった問題を解消したといえよう。但し、漢字の場合は活用語形を示すことが出来ないもので、『大塔物語』では「梟」字に小書きを付すか、あるいは「梟者」（ケルハ・ケレバ）、「梟杜」（ケルコソ）など定型化して「梟」字が使用されている。

真名軍記に限らず「ケリ」を漢字によつて表記する資料としては、先に真仮名の用例を掲げた『塵荊抄』がある。

真仮名表記が前節に掲げた用例を含めて計五例（「ケリ」四例、「ケル」一例）あり、漢字表記は次に掲げる用例以外に二例の計三例である。

ケリ

浪多加躬荒磯崎乃浜松和琴一加羅乃響也梟

(下三七二2)

先の真名軍記の韻文においては、助動詞「ケリ」は真仮

名で表記されていたが、この用例では漢字表記されている。この用例では真仮名を主体としながらも「ケリ」を漢字表記していることについては検討の余地がありそうであるが、ここでは指摘に留めておく。

さて、これまで「ケリ」の表記として小書き、真仮名、漢字についてそれぞれ検討をしてきたが、漢字と小書きに加え、本行片仮名表記を混用する資料として『異本官地論』¹⁸がある。『官地論』は、長享年間（一四八七～一四八九）の一向一揆の記録であるが、その一本として漢字表記を主体とする真名本が存する。助動詞「ケリ」の表記に関して、これまで取り上げてきた資料とは異質な表記形態を持つ『異本官地論』について、次に検討をしたい。

五、『異本官地論』の「ケリ」

『異本官地論』の「ケリ」は、ここまで取り上げてこなかった、小書きではなく本行にカタカナで記される「ケリ」が存する。そして、片仮名、漢字、小書きのそれぞれの用例数は、

片仮名 74例
漢字 12例
小書き 5例

となっており、本文の表記体は漢字を主体とする真名本で

ありながらも「ケリ」については片仮名表記が主体であることがわかる。

『異本官地論』の本行片仮名、漢字表記、小書きの用例数をそれぞれ表に纏めると以下のようになる。章段は、『異本官地論』のものに従っている。章段ごとに言語量の差はあるものの、全体的な分布の把握のために章段に従って表を作成した。

章 段		片仮名	漢字	小書き
佐々木高頼追討事	1			
富樫一揆退治訴訟付高尾城楯籠事				1
一揆和歎訴訟事付三河守諫言	1			
一揆等構久安要害楯籠事	1			
国中一揆蜂起高尾城取巻事	2			
本郷河合言闘事	4			
於大乘寺一揆等軍評定事	3			1
越中官軍敗北事	4			
高尾城攻事	10			
城中酒宴磯部木越送牒状事付返牒事	4			
正親北方送京都事	5			
	7			

北方出家授戒事	5		
槻橋八屋守義事	7	1	2
山河本折降人出事	5		
正親最後合戦事	5		
正親最後士卒自害事	17	1	1
越前官兵敗北注進事			

本行片仮名

正親宣ケルハ、強不^{チニ}可^レ作^ヲ罪^ヲ、怖^ヲ来^ノ世^ノ報^{イモ}。去^{イサヤ}来^ヤ
面々切^ラ腹宣ケレハ、左承^{サリト}候^テ、暈^ヲ五六十帖^ミ擲^テ出^ノ広^シ
庭^{シキミ}敷^ミ既^イ欲^イ切^シ腹^シ。
(六〇上7)

漢字

従^ル老衆^{マテ}至^リ 若衆^ニ、参^リ御前^ニ大瓶^ニ共立^{サテ}並^ヘ、無^ク上下^モ推^シ並^シ、
被^レ遊^{ケル}配^ハ。
(五二下2)

小書き

矢倉之下^{タヨリトスル}トニハ鞍置馬^{ケリ}十重^{トモ}廿重^{ケリ}引立^タ、非^ニ于^{スハ}鬼魅^{カミミ}
少^タ縁^{ヨリ}、輒^{トモ}可^レ破^{ケリ}不^レ見^ミ
(四六上12)

右のように、「ケリ」の表記としては三通り見られ、片仮名が全編に渡って使用されている。このような事実から、真名本ではなく漢字片仮名混じり文ではないか、という解

釈も生まれてこようが、真名本としての表記上の特徴も指摘でき、片仮名「ケリ」は日本語の再現性のために使用されてたものと考えられる。

このように本行片仮名を捉えようと、『大塔物語』の諸本として版本のほか、宮内庁書陵部本²⁰⁾があるが、この資料の表記体は漢字を主体としながらも片仮名を本行に交えている。また、小書きや漢字表記による「ケリ」が存せず、単純に表記からのみ捉えようと、漢字を主体とする漢字片仮名混じり文ということになる。漢字表記のみの冒頭部と本行片仮名を交える部分とについてそれぞれ用例を掲げると以下のようである。

夫政者天下泰平計畧國土安穩の根源也然而近代御政務賞罰直而都鄙悉令靜謐上下誇無事萬民詠歡樂然間孰不貴憲法之裁斷誰不仰簾直之成敗乎抑信濃國小笠原信濃守長秀親遠祖長清祖父政長以來代々爲任補守護職所也

(二〇一)

片仮名がなく、漢字文の様式をとっているが、同一資料の後の部分では次のように片仮名を交える。

爰^ニ古米入道一人不食之而廿一日空腹角飢死事當家之恥辱後代之瑕瑾也去來子共一人ツ、忍落我^ラハ可切後爾有者永継名字ヘシト云皆々同此義^ニ先古米入道常葉入道各嫡子近付汝等能々承

(二一ウ5)

右の片仮名混用部分の片仮名語は助詞助動詞などの語で

あり、漢字による日本語形の再現に困難が伴うものであることがうかがえる。

後の用例の表記体が成立する背景には、漢字文を志向しつつも助詞助動詞などの漢字文には馴染まない語を片仮名で表記した、真名本の表記形態であると捉えても良いのではないかと考える。

六、まとめ

ここまで検討してきたことがらをまとめると、以下のようになる。真名本に見られる小書き「ケリ」は、背後にある日本語を正確に再現させようとする意図のもとに付されていると理解できる一方で、資料としての成立の背景が不明瞭な漢字文については、訓点であるか小書きであるかの判断は慎重にしなければならない。

真仮名については、韻文の場合には字種に多様性を伺うことができるが、本稿の範囲では十分な検討とは言い難い。今後の課題としたい。

漢字表記については、小書き、真仮名の問題点である漢字文としての異質性を解消することになったが、日本語形の再現という問題が残されていることを指摘した。

最後に、一見漢字片仮名混じり文と思われる表記形態の部分を持つ『異本官地論』を取り上げ、本行に片仮名で記

されている助動詞「ケリ」は、漢字文を志向しながらも日本語の再現性を優先したために漢字文中に残された可能性を指摘した。また、このことが認められるのであれば、小書きや漢字の「ケリ」は無く、漢字片仮名のみで表記された宮内庁書陵部本についても真名本を志向した表記形態であることを指摘した。

ただし、助詞助動詞を片仮名書きにすることが真名化の方法として認められれば、結局漢字片仮名混じり文と区別ができないということになる。そのような考えを敷衍すると、漢字片仮名混じり文と一括りにされている文章は、最初から漢字に片仮名を混ぜようと思図したものと、漢字文を志向しながらも片仮名を混ぜざるを得なかったものがあるということになる。中世の漢字を主体とする漢字片仮名混じり文については今後再検討の余地があるということであろう。

本稿では十分に検討することができなかったが、『文正記』では「ツラツラ」などの擬音語の漢字表記など、真名本としての特徴を有しているが、「ケリ」は用いられない。また、江戸時代初期に成立した軍記では真仮名はもちろんのこと、小書きや漢字表記の「ケリ」が見いだせない。この事実だけを考えれば、これらの資料は真名本とするよりは、第一義的変体漢文に近いということかもしれない。あるいは、真名本の展開の一つと捉えるべきかもしれない。

今後の課題としたい。

助動詞「ケリ」の表記をめぐって、それぞれの資料における工夫の有様について検討してきたのであるが、最後にこのような工夫の意義について述べておきたい。

第一義的変体漢文に始まる変体漢文の歴史は、中世に入って第二義的変体漢文へと展開してゆく。このような展開の背景には日本語を漢字によって正確に再現するという意識が垣間見える。そしてそのことは和語で表現可能である語を漢字により正確に日本語表現をしようとする態度と通じるのではないかと考える。漢語が和製漢語を派生させるように、漢文が和製漢文を派生させる。そしていずれも日本語としての再現性を求める展開をしてゆくということである。語の歴史的展開と文の歴史的展開とが時代を同じくしながら変化してゆく様相を見て取れるように思う。

注

- 1 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（東京大学出版会、一九六三年三月、九二四頁）
- 2 峰岸明「記録体」（『岩波講座日本語10文体』岩波書店、一九七七年九月、一六九頁）に、「記録体の文章では、その国語文が漢字表記という表記様式にその姿を埋没している」としている。
- 3 『応永記』の用例及び所在は、『古典資料7 応永記・明德記』（すみや書房、一九七〇年十二月）による。

4 小林賢章氏は、『「応永記」の真名化』（『人文学論集』第一集、大阪府立大学人文学会）において「小書き」とされている。稿者も、表記上は漢文訓読資料における訓点と同様ではあるが、仮名本を前提としているので「小書き」とする。

5 小林賢章『「応永記」の真名化』（『人文学論集』第一集、大阪府立大学人文学会）

6 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』（東京大学出版会、一九六三年三月、六二頁）では、「（前略）助動詞「けり」「けむ」「らし」なり（推定伝聞）」などは、奈良時代の文献にも見えるし、又、平安時代の和歌や和文にも見出される。所がこれに反して訓読に於いては、原則的に用ゐられない。」としている。また、同書三二六頁においても『慈恩伝古点』の用例について、「ケリは僅か五例ですべて終止形、何れも詠歎の意に用ゐてある。」としている。『訓点語彙集成 第三卷』（二〇〇七年一月）によっても、助動詞「キ」の用例数に比して少なく、また「ケリ」の活用形も終止形が多いことが分かる。

7 小林賢章『「応永記」の真名化』（『人文学論集』第一集、大阪府立大学人文学会）

8 公爵前田家育徳財団刊行『真名本平家物語』による。

9 京都大学文学部国語学国文学研究室編『平松家本平家物語』（清文堂、一九八八年五月）

10 拙稿「妙本寺本曾我物語における「則」字訓について」（『国文学攷』一五七号、一九九八年三月）など。

11 用例は、神道大系編纂会編『神道大系文学編一 神道集』

- (神道大系編纂会、一九八八年二月)による。
- 12 短連歌の場合は、それぞれを一首と数えている。以下、他資料についても同じ。
- 13 勉誠社文庫『将門記』(勉誠社、一九八五年六月)による。
- 14 市古貞次編『塵荊抄』(古典文庫、一九八四年一月)による。
- 15 高橋忠彦・高橋久子編『真名本伊勢物語 本文と索引』(新典社、二〇〇〇年三月)によった。
- 16 表中には「逃利」(ニケリ)のような用例は含めていない。
- 17 広島大学中央図書館蔵本による。
- 18 真宗史料刊行会編『大系真宗資料 文書記録編11 一向一揆』(法蔵館、二〇〇七年一〇月)による。
- 19 大桑斉氏が、『大系真宗資料 文書記録編11 一向一揆』三九九頁において「ケリ」に関わる指摘をしている。
- 20 紙焼き写真による。

(本学教授)